Advent Candles

待降節の灯火

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19110656

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後, 勇者アバンと獄炎の魔王

ヒュンマアドベント用に書いたはずだったんですが……間に合わなかったので、さらに１シーン足して、ちょっと長めの話にしました。

ヒュンケルがネイル村に移住して初めての冬です。
獄炎登場のマァムおじいちゃんが出てきます。
特に、１ページ目は、以前書いた「懺悔」illust/96004367の発展形になります。

なお、このキャンドルは、実在します。世俗化しているとも見ましたが、信仰の対象でもあるようです。

待降節の灯火

　静まり返った室内に、蝋燭の火が揺らめいた。
　テーブルの中央には、燭台に乗せられた蝋燭が１本、炎を揺らしながら影を投げかけていた。
　ヒュンケルはテーブルの上で両手を組んだまま、訥々と話を続けていた。
　淡々と語られるその内容は、己の半生であったはずなのに、何の感情も交えぬまま、ただ事実だけが並べられていった。両手に視線を落とした彼の表情はうかがい知れなかったが、時折揺れるその声色が、彼の心情を物語っていた。
　アリアムは、そんな彼を視界に映しながら、黙ってその語りを聞いていた。
　ネイル村の神父であったアリアムであるが、いまはその職を後進に譲り、隠居している身であった。
　神父であった頃から、こうして、村人たちの話を黙って聞いていることは、よくあった。
　だが、ヒュンケルの口から語られたその内容は、これまで村人たちから聞いていたどの物語よりも、格段に重く苦しいものだった。
　やがて、言葉がやんだ。
　ヒュンケルは、いったん言葉を区切ると、苦し気に口を開いた。ようやく見せた、彼の心情だった。
「お話したことは、すべて事実です。
　これが、俺のやってきたことです。
　マァムの祖父である貴方に隠し事はしたくなかった。
　その上で、ご判断があるのであれば・・・ご指示、いただきたい。」
　最後の言葉を口にするとき、ヒュンケルの手が、わずかに震えたのが見えた。
　ヒュンケルは、数日前にネイル村に挨拶に来たばかりだった。花の咲くこの季節、春の日差しに迎えられるかのように此処に移住しようというその時期に、彼はひとりでアリアムの下を訪ねた。

マァムには、ここに来ることは話していないと、ヒュンケルは言った。
ネイル村に移り住むにあたって、レイラが、長老をはじめとした村の有力者たちに根回しをしてくれていたのは、ヒュンケルも知っていた。
レイラがどこまでのことを彼らに告げていたのかは、ヒュンケルは聞いていなかった。
だからこそ、マァムにつながるこの老人には、すべてを話しておく必要があるとヒュンケルは感じていた。
もし、前神父たるアリアムが、ヒュンケルの受け入れに反対すれば、レイラの努力も水泡に帰すかもしれないことは、彼も分かっていた。
それでも、ヒュンケルはアリアムの下を訪ねたのは、ただ、彼の愛する人の家族に誠実でありたいとの思いからであった。
ヒュンケルが口を閉ざすと、アリアムも、しばらく沈黙を保っていた。
だが、ふと蝋燭に視線を向けると、老神父は、思いがけない言葉を口にした。
「少し、暗いね。
灯りを足そうか。」
そう言うと、アリアムは、席を立った。虚を突かれたヒュンケルは、反射的に顔を上げた。すると、アリアムがテーブルから離れ、部屋を出ようとした。
その姿勢のまま、ヒュンケルと目が合うと、ヒュンケルを安心させるように、彼は笑みを浮かべた。彼は、ヒュンケルに手を差し出して、そのまま座っているように、合図をした。
戸惑うヒュンケルが動けずにいると、アリアムはすぐに戻ってきた。
そして、テーブルの上に、もう一つの燭台を置いた。
その燭台には、蝋燭が乗せられていた。
だが、その蠟燭の色は、ヒュンケルには見慣れない色をしていた。
アリアムは、慣れた手つきで、もう1本の蝋燭にも火を移した。

「この蝋燭は、本当はこの時期に使うものではないのだよ。だが、今日はこれを灯そうと思った。」
　２本の蝋燭の火が揺らめき、大きな影を投げかける。
　ヒュンケルが不思議そうな視線を蝋燭に投げかけていると、アリアムが尋ねた。
「初めて見たのかな。この色の蝋燭は。」
「・・・はい。」
　ヒュンケルの目の前で点されたそれは、鮮やかな菫色（すみれいろ）の蠟燭だった。
　アリアムもまた灯火に視線を投げかけたまま、言葉を継いだ。
「これはね、ある特別な時期に使うものなのだ。
　この蝋燭が、このように菫色をしているのは、意味がある。」
　そして、アリアムは、今度はヒュンケルに視線を向けた。ヒュンケルもまた、老神父の視線に気付き、彼に視線を合わせた。
　アリアムは尋ねた。
「闘志の使徒、ヒュンケル。
　貴方の魂の色は、紫だったね。」
「はい。」
　ヒュンケルはうなずいた。
　そして、また、アリアムは蝋燭に視線を戻した。
「貴方の魂の色が紫だと聞いた時には、私は神の御意志を感じたよ。
　貴方がどう生きてきたのかは、レイラからも聞いている。
　その貴方を象徴する色が紫なのか・・・と思ってね。」
　そして、アリアムは、再度、ヒュンケルに視線を合わせた。老神父は、まっすぐに、孫娘の伴侶となる男を見つめた。
「紫は、懺悔の色なのだよ、ヒュンケル。」
　ヒュンケルは、小さく声を上げた。
　アリアムは、そのまま言葉をつづけた。
「驚いたかね。
　私も驚いたよ。そして、その巡りあわせに唸った。
　何の因果なのか、いや、これも神の采配なのか、とね。」
　言葉を返せずにいるヒュンケルに向かい、アリアムはそのまま言

葉をつづけた。
「ヒュンケル、人は皆、罪を背負って生きている。
　貴方はその罪が少しばかり大きく、そしてまた目につきやすいものだった。
　貴方は自分の過去をそのまま受け止め、罪だと認めて生きていこうとしている。
　それは、その貴方の生きざま自体が懺悔の道なのだと、私は思う。」
　そして、アリアムは、神職らしい言葉をヒュンケルに示した。
「貴方の生きる道は、既に、神が示している。」
　それは、神父として生きてきたこの老人からの、最大限の祝福の言葉なのだとヒュンケルは気付いた。
　ヒュンケルは、信仰を持たない。
　幼いころから、彼は神を信じる環境にはなかった。
　自分は神を信じるに値する者ではないのだと、現在のヒュンケルは思っていた。
　そこに、不意に与えられた祝福の言葉に、ヒュンケルは戸惑った。
　神父であった男の言葉は、水面に落ちた小さな雫のように波紋を描き、広がった。
　そして、その雫が深く沈み、時間をかけ、ゆっくりと、その意味がヒュンケルの胸に落ちてきた。
　彼は、うつむき、そのことばをかみしめた。
　アリアムは、そんなヒュンケルを見つめながら、その柔和な瞳を穏やかに緩め、切なげに微笑んだ。
「私はね、まだ小さかった頃の貴方を覚えているよ。アバン様に連れられていたころのね。
　そして、貴方とはぐれたと言って傷心していたアバン様も見てきた。
　レイラから、貴方が生きていたことを聞いて喜んだが、同時に痛ましく思ったよ。なんという過酷な道を歩ませてしまったのか、とね。
　これは、少年だった貴方を守り切れなかった私たち大人の責任で

もある。」
　アリアムからの精いっぱいの配慮に、ヒュンケルは、静かに首を横に振った。
「・・・いいえ。すべては俺が自分で選んできたことです。」
　アリアムは、ヒュンケルを呼んだ。
「ヒュンケル。」
　うつむいた彼の肩が、ぴくりと震えた。
「私が貴方に望むことは１つだけだ。
　貴方には、長く生きてほしい。」
　その言葉の裏に、ヒュンケルは、アリアムが見送った多くの亡き人の影を感じた。
　その中には、彼の愛する人の父の後姿もあった。
　ヒュンケルは、頭を垂れたまま、アリアムの言葉に頷いた。
　そうすることしかできなかった。
　ヒュンケルの前で、菫色の蝋燭の火が、ただ静かに揺れていた。

その日の夜空は、宝石箱をひっくり返したような満天の星空だった。
　真冬の冷たい空気が空を引き締めて、いっそう星々を鮮やかに見せていた。
　マァムは白い息を吐きながら空を見上げ、嬉しそうにつぶやいた。
「聖誕祭って、雪が降るのも素敵だけど、こんな晴れた夜空もいいわね。」
「ああ。」
　妻の言葉に頷きながら、ヒュンケルは、そっと彼女の手を握った。外に出てわずかな時間しか経っていなかったが、彼女の指先は冷たくなっていた。
　その手を、ヒュンケルは自身の体温で温めていた。
　握られた手の温かさに気付き、マァムは、夫を見上げた。
「ありがとう。ヒュンケルの手、あったかいわ。」
「今日は頑張ってくれたからな。」
「私ひとりじゃ無理だったわ。母さんに教えてもらったし。結構、

やってもらったところも多かったのよ。」
「十分やってくれたさ。
　それに、レイラさんも楽しかったんじゃないのか。お前と料理ができて。」
「ありがとう。」
　ヒュンケルからの賞賛の言葉に、マァムは礼を述べて、微笑んだ。
　聖誕祭の夜、マァムはネイル村の新居に母を招き、ヒュンケルと３人で夕食を共にした。といっても、昼間からレイラがふたりの家に行き、母娘で、聖誕祭用のごちそうを作っていたのだ。
　そして、ひとしきり、ディナーを楽しんだ後、ふたりでレイラを見送ったのだ。ヒュンケルは、レイラに家まで送っていくと言ったのだが、レイラは、それほどの距離でもないし、そんなにおばあちゃんじゃないわよと冗談を言って、帰っていった。
　そんなレイラを見送りに、ふたりで表に出ていたのだが、マァムが満天の星空に目を奪われたのだった。
　ヒュンケルは、マァムの手を握る己の手に力を込めた。
「寒いな。
　中に戻るか。」
「うん。」
　もちろん、彼自身が寒かったのではなく、マァムを気遣ってのことだということは、マァムにもよくわかっていた。

　ふたりで食卓を片付け終わると、マァムはまたキッチンに戻った。ヒュンケルのためにホットワインを入れようと思ったのだ。くつくつと、火にかけた鍋から立ち上るシナモンとクローブの香りが、鼻腔をくすぐる。
　マァムがヒュンケルのためのホットワインを持ってダイニングテーブルに戻ると、ヒュンケルは、ダイニングテーブルの上で両手を組み、目を閉じていた。その彼の先には、４本の揺れるキャンドルの光があった。
　テーブルの上には、緑の葉やリボン、松ぼっくりなどを組み合わせて作ったリースが置かれており、そこに４本のキャンドルが立て

られていた。
　４本のキャンドルはゆらめき、柔らかな光を投げていた。
　マァムがそっとホットワインのカップを置くと、ことりと小さな音が響いた。その拍子に、ヒュンケルが顔を上げた。
　ヒュンケルが何をしていたのか分かっていたマァムは、申し訳なさそうな顔で彼に尋ねた。
「ごめんなさい、邪魔しちゃった？」
「いや。
　ありがとう。」
　ヒュンケルは軽く首をふると、逆に、目の前に置かれたカップの礼を述べた。
　マァムもホットワインを持ってきたが、マァムは自分用には、よりしっかりとアルコール分を飛ばしていた。
　ヒュンケルがホットワインで体を温めているとマァムは、テーブルの上のキャンドルを見つめながら、ぽつりとつぶやいた。
「もう少ししたらこれも片付けないとね・・・。
　待降節の間は賑やかだったけど、明けちゃうと寂しくなっちゃうのよね。」
　キャンドルが立てられているのは、アドベントリースと呼ばれるものであり、聖誕祭までの４週間である待降節中に飾られるものだった。
　聖誕祭までの４週間、日曜日が繰る毎に、１本ずつキャンドルに火を点してゆき、聖誕祭までには、すべてのキャンドルの炎が揺らめくのだ。
　ヒュンケルもキャンドルに目をやりながら、マァムに尋ねた。
「いつ片付けるんだ？」
「年明け、少ししたらね。１月６日かな。」
「決まっているのか。」
「そう。
　聖誕祭期間の終わりにね。」
　そう言いながら、マァムは、アルコールのほとんどなくなったホットワインを口に運んだ。
　大魔王との戦いが終わって数年間をカールのアバンの下で過ごし

ていたヒュンケルは、聖誕祭や待降節の習慣はある程度理解していた。
　ヒュンケルは、カールでの日々を思い返しながら、マァムに尋ねた。
「この地方のキャンドルはこの色なんだな。」
「うん。」
「マァムがロモスの城下でこれを買ったときには、少し驚いた。
こっちではこの色なのかと思ってな。」
「カールは違った？」
「ああ。キャンドルの色が違った。
　白か赤だったな。」
「そうなのね。」
　マァムはヒュンケルの話を聞きながら、キャンドルに視線を戻した。
　３本のキャンドルは、落ち着いた菫色。
　待降節にしかないその色彩が、炎の影を受けて、独特の雰囲気を醸し出していた。
　すると、少しして、マァムが言いにくそうに、言葉を漏らした。
「待降節のキャンドルって、この辺だと昔からこの色で、私もおじいちゃんに謂れを教わっていたんだけどね・・・。
　前は何の不思議もなかったんだけど・・・。」
　マァムの祖父であるアリアムは、ネイル村の神父だった。教会でのミサを取り仕切り、村人たちに訓話も授ける。
　アリアムは、孫娘であるマァムに、幼いころから、よく聖誕祭の物語を聞かせていた。だから、もともと、このキャンドルの意味については、マァムはよく知っていたし、そこに違和感もなかったのだ。
　いままでは。
　マァムはそこで言葉を区切った。
　なかなか次の言葉が出ない彼女に、ヒュンケルが尋ねた。
「どうかしたのか？」
　マァムは、手の中のマグカップを弄びながら、視線を落としていた。頬がほんのりと赤らんでいる。マァムのホットワインは、ほと

んどアルコールが入っていなかったはずだったのに。
「・・・だって、なんか、ヒュンケルみたいで・・・。」
「え？」
　ヒュンケルは意味が分からず、戸惑った。
　彼が言葉を返せずにいると、マァムは、視線をマグカップに落としたまま、呟いた。
「ヒュンケルの魂の色って・・・紫だったじゃない？
　だから、紫色のキャンドル見るたびに、ヒュンケルのこと思い出しちゃって・・・。」
　そう語るマァムの頬は、先ほどよりも赤らんでいた。
　突然、マァムに自分のことを語られ、ヒュンケルも驚いた。だが、くすぐったくも、胸が温かい。
「俺のことを考えてくれてたのか。」
「・・・だって・・・。」
　マァムはいっそう恥ずかし気に顔を下に向けていた。ヒュンケルの方を見ることもできないようだ。
　ヒュンケルは、落ち着いた声でマァムを呼んだ。
「マァム。
　４本目のキャンドルだけ色が違うな。」
　話題が変わったせいだろうか、マァムはようやく顔を上げた。
　彼女の前で、４本目のキャンドルが炎を揺らしていた。
　その色は、薔薇色。
　マァムはうなずいた。
「あ、うん。そうよ。
　聖誕祭前の日曜日につけるの。愛を表すんですって。」
　すると、ヒュンケルは、マァムの髪にそっと触れた。
　肩先で揺れるマァムの桃色の髪が、ヒュンケルの長い指にからめとられた。
　ヒュンケルは、マァムの髪を絡めた指を軽く引き寄せると、彼女を見つめながらつぶやいた。
「お前の髪の色だな。」
「えっ・・・。」
　今度はマァムが戸惑う番だった。

驚くマァムを気にせず、ヒュンケルはそのまま言葉をつづけた。
「愛か・・・。
　お前の魂の力だな。
　お前らしいキャンドルだ。」
「えっ・・・。」
「俺も、これを見るたびに、お前を思い浮かべていた。」
「えええええっ・・・！」
　マァムは、先ほどよりも数段、顔を赤らめ、両手で頬を覆った。その拍子に、するりと、ヒュンケルの指から、マァムの薔薇色の髪がすり抜けた。
　ヒュンケルが、幾分、意地の悪い笑みを浮かべた。
「何だ、気付いてなかったのか。」
「ぜ、全然・・・。」
「レイラさんも、このキャンドルを見ると、ロカさんとマァムを思い出すと言っていたぞ。」
　マァムは遠い日の記憶を思い起こした。
　そう言えば、マァムが子どもだった頃、レイラが待降節のキャンドルを見ながらロカを思い出すと言っていたことがあった。
　よく考えれば、そこからロカに似た自分の髪色を思い浮かべることはできたはずなのだが。
　マァムは、全くそこまで思い至っていなかった。
「じゃ、じゃあ、母さんは・・・。」
　アバンの使徒の物語は、すでにあちこちで語られていた。当然、その中には、ミナカトールの五色の光のエピソードも含まれていた。
　レイラが知らないはずがない。
　マァムは、上手く言葉を継げないかのように口をぱくぱくとさせ、狼狽していた。
「ど、どうしよう・・・。
　私とヒュンケルの色で飾っちゃってたみたいじゃない！」
　マァムの動揺を目の当たりにし、ヒュンケルはおかしそうに笑いをかみ殺していた。
　そんな彼に、マァムは、必死で訴えかけた。

「ヒュンケル、来年の待降節は白いキャンドルにしましょう。」
「いや、ダメだ。
　来年もこれと同じだな。」
「ヒュンケル！」
　ひとことで拒否され、マァムは困り果てたように夫を呼んだ。
　だが、ヒュンケルは、再度、マァムの髪に手を伸ばし、彼女の髪を指に絡めた。そして、そっと、その髪の房に口づけた。
　ヒュンケルは、愛おしそうに彼女を見つめながら、呟いた。
「このキャンドルの意味は、アリアム様にもうかがった。
　俺には思うところがあるが、それよりも、これを見て、お前が俺を思い浮かべてくれるのが嬉しい。」
　そして、彼は、熱っぽい視線をマァムに向けると、囁くように、マァムに尋ねた。
「マァム。
　今日、この先は、お前を独り占めしたい。」
　そう語る彼の眼差しが、そのことばが、彼の欲するところを明確に物語っていた。
　マァムは、先ほどとは異なる意味で顔を赤らめた。
　そして、マァムは、彼の胸元に額を寄せると、消え入りそうな声で、答えを返した。
「・・・うん。」
　そのまま、マァムは、彼の背に腕を回した。
　彼女もまた、自分の背に、彼の腕の感触を感じた。
「慈愛の使徒だったな、お前は。
　だが、いまは、お前の愛を独占させてくれ。」
　そう言うと、ヒュンケルは、３本の菫色のキャンドルの灯を吹き消した。
　１本だけ残された薔薇色のキャンドルの灯が、彼の視界に揺らめいた。その小さな灯火を見つめながら、ヒュンケルは愛おし気に微笑んだ。
　いつか、アリアムに聞いた言葉が、脳裏に蘇る。
ー菫色の蝋燭は、懺悔の証。
　だが、これはね、愛を示す蝋燭に繋がるのだよ。

薔薇色のね。
　ヒュンケルの目の前で、薔薇色の光が揺れていた。
「名残惜しいな。」
　そして、彼は、愛を表す最後の１本のキャンドルの灯も吹き消した。
　次は、彼が腕の中の妻に愛を表す番だった。